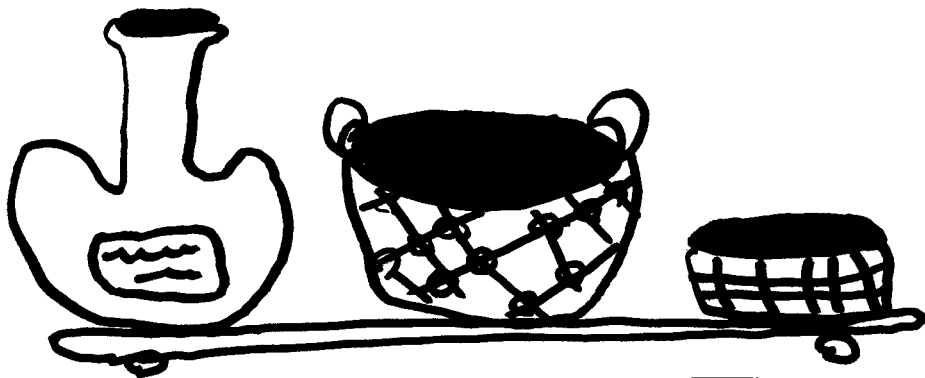
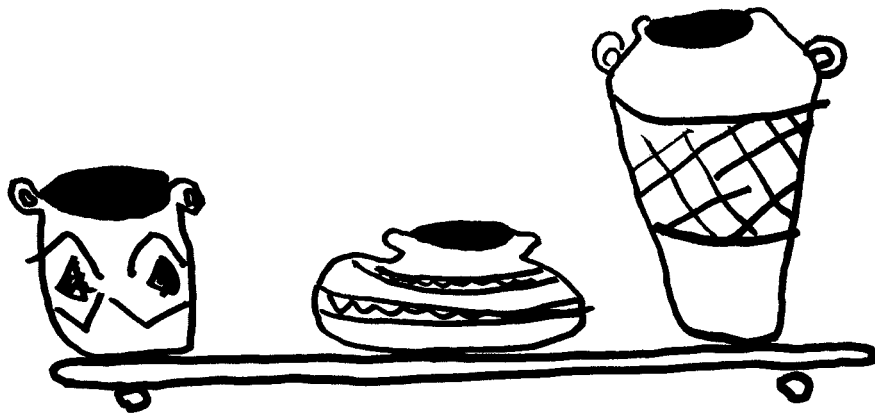
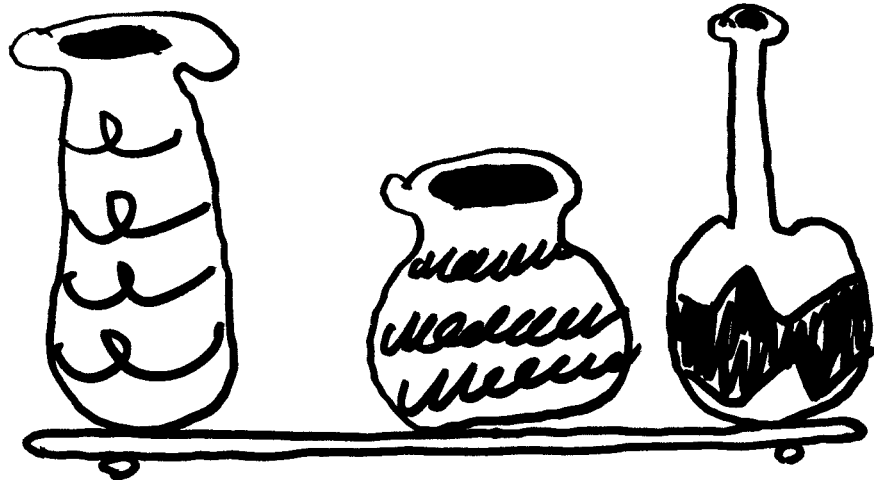
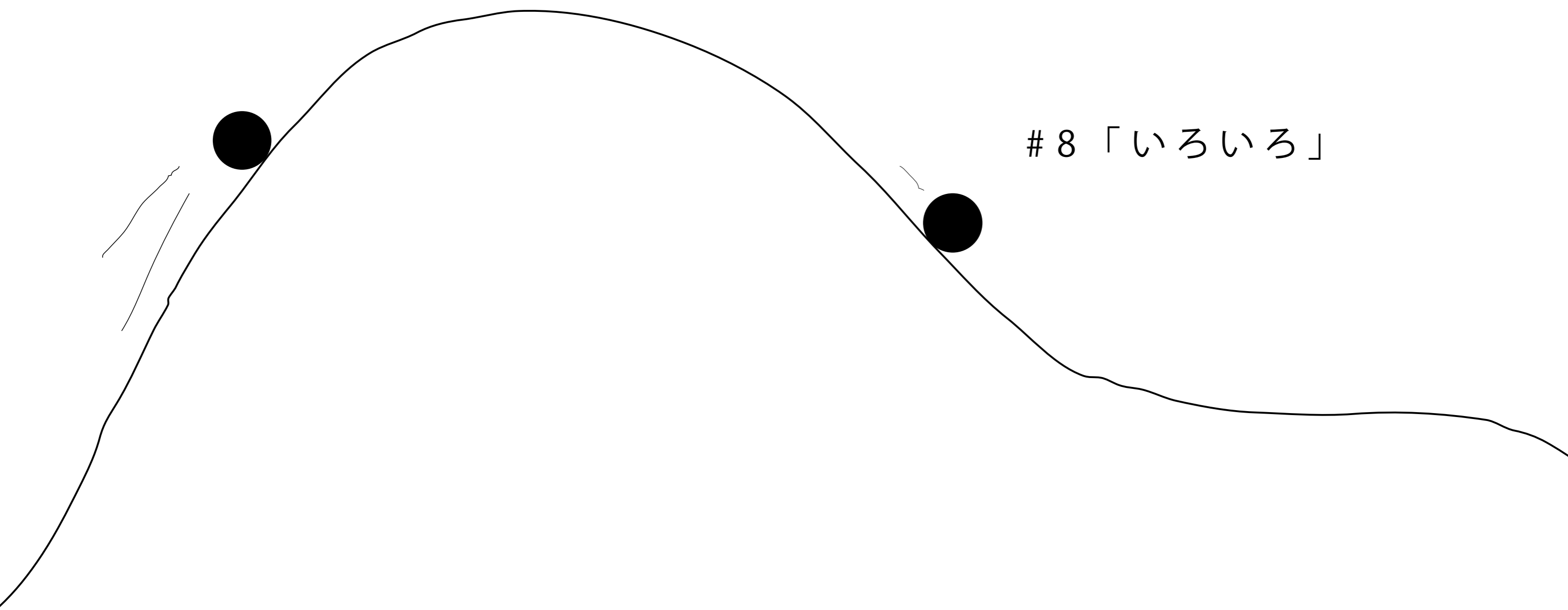


週刊

たまたま、



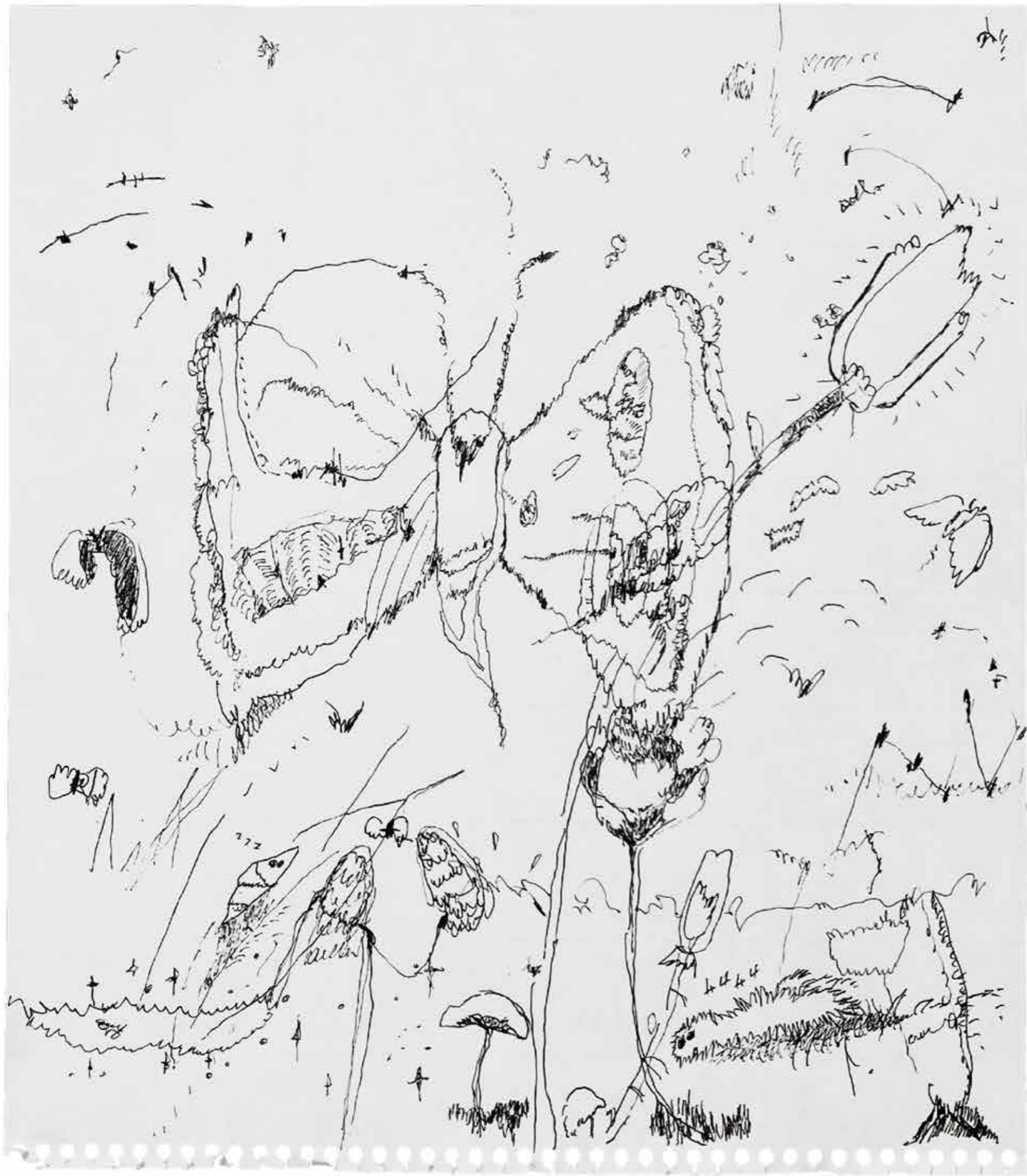


#8 「いろいろ」



例の十万円のことを考えてはいろいろ欲しくなる日々





(ほんやり)
 うんざり
 可き
 くるしい
 うれしい
 きもちいい
 いやだ
 さましい
 きれいだ
 きれい
 しあわせ
 たのしい
 まかつく
 たまつく
 わくわく
 びっくり
 かわいい
 おもしろい

ファミコンカセットはフーフーしてから

僕は18の時に大学をやめた。なんかその時は、何もかもが嫌でね。それでやることなく、地元の旅館につとめたんだ。僕はそこのフロント業務をしていて、いらっしやいませ、おつかれさまでしたなんて言ってどうでもいい客に茶と花豆を出した。これがべらぼうにうまいから、よく女将さんの目を盗んで食ってたよ。

入ったすぐの二週間後くらいに、社会をなめてるのかと社長に怒られたんだけど、その時付き合ってた彼女とその後待ち合わせしてたから早くおわんねえかになって正直思った。その時、女将さんがあんま気にせんでいいよって京都のあめをくれた。ちゃんと封に入ってるやつ。その時あめを舐める気分じゃなかったから作務衣の腹ポケットに突っ込んだ。

午後6時から9時はもうずっとフロントに立ちっぱなしだったんだけど、その間酔っ払った客がきた。僕は無視して、なんかひたすらぼーとしてたな。ああ、こうやって僕の人生の大切な時間は過ぎていくのかってね。

その代わり無駄に金は増えだし、買いたいと思ったものはなんでも買った。まあ色々やり過ぎせるようになった12月、その月はすごく忙しいんだ。毎週金曜日か土曜日にはどこかの企業の忘年会でね。それで決まって酌婦がきた。身も心も凍えるくらい寒い日なのに裏口から入ってきて、全員ミニスカートの同じ制服を着せられていた。その日に予約していた会社は羽ぶりがいいらしく、6時に8人きた。大体一人頼むのに2時間で1万くらいでカラオケの延長なんてしたらまた何倍にもふくれあがるだよ。僕は明細を見るから知ってるんだ。それで、18のわかぞうの僕1人に8人がわざわざ整列して、その中のチーフが号令を合図して、よろしく願いますっていうんだ。もう、どう反応していいかわからなくてぎこちない会釈をしていたな。いきなりスポーツを何も知らないのに、女子バレー部の顧問になったような感じだよ。自分の位置がわからなくなったよ。で、その中に美人が混じってたりするから、それまた気分がわるくなるんだよ。なんでこんな仕事してんだよってね。まあそれはお互い様な気がした。彼女達は彼女達に、僕は僕なりに生きてたんだよ。まあそれで、今日はどこそこの宴会場ですって、案内した。その8人が入ると、キリンのように首ながなハイヒールは廊下の窓側に綺麗に並べられた。8足のハイヒールはほんとにどんぐりの背比べみたいに私のが高いわって言い合ってた。まあそれで僕の仕事は終わったから、フロントに戻った。

古くさいこの昭和な旅館に8人分も香水がまかれると僕はほんとうに昭和にタイムスリップしたような錯覚がした。それはそれで僕はなんだか心地よかった。だって、その時代は僕がいなかったからね。

それでまあフロントで終わりの9時まで暇をつぶしてた。ストーブにまきを入れたり、旅館を探検して回ってる子ども達の相手をしたり。フロントにはファミコンが置いてあって、そのちびっこ達にカセットのそこをふーふーしてから入れることを教えたりした。たぶんこいつらはもう一生やらないだろうなとも思いながらね。

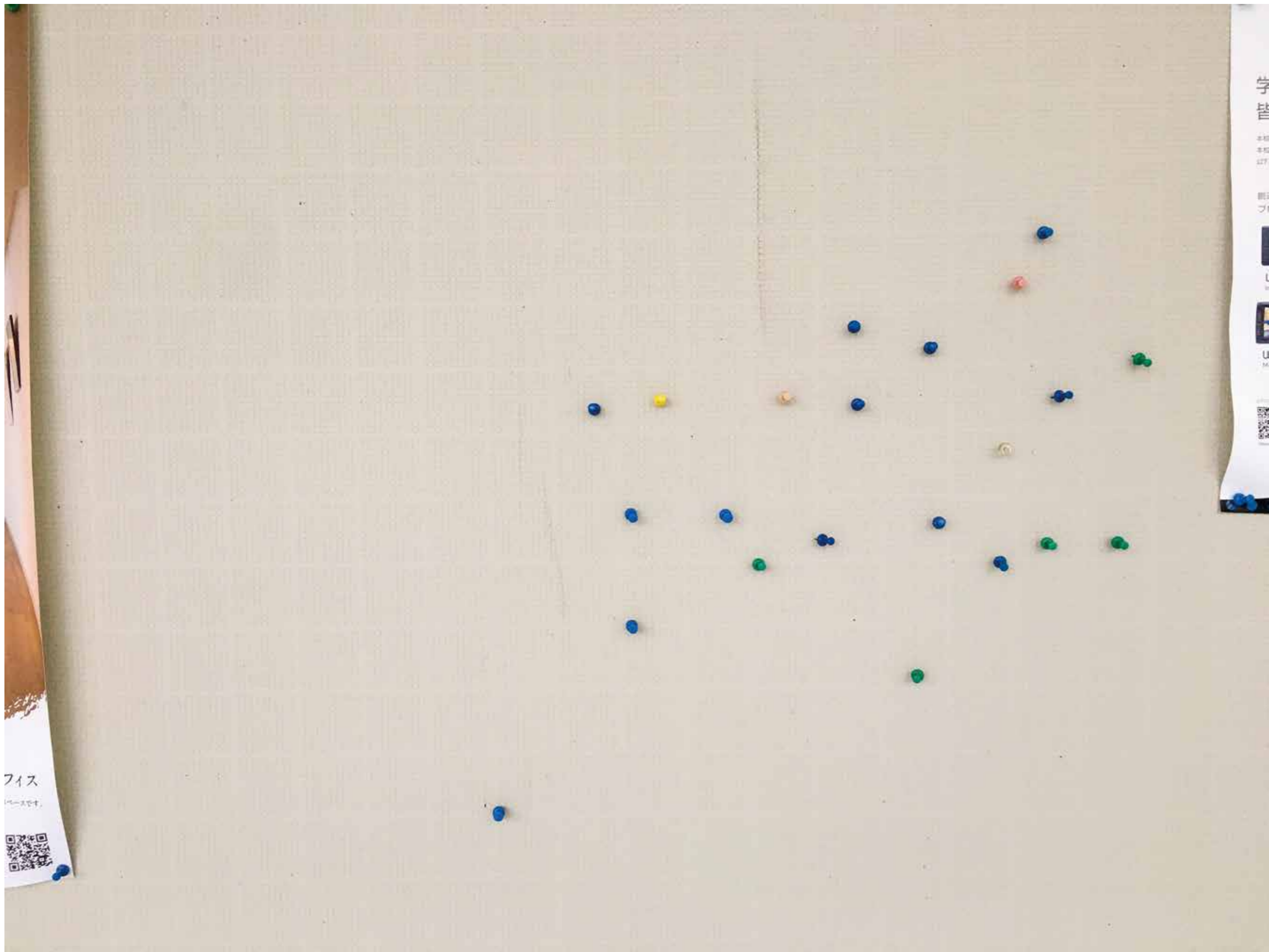
そんなことをしてたら9時になった。うし、帰るかと思ったら、酌婦の一人が泣いて階段から降りてきた。おいおい、まじかよ。その子は僕とそう年齢は変わらないような子だったんだぜ。それでもって、8人の中で一番美人の子だったんだ。ほっておけないけど、どう声かけていいかもわからないし、彼女の問題を僕に解決できるのだろうかとか考えたんだけど、そんなのできないってことくらい18歳の僕でも知ってた。それでその時何を考え出したかわかんないけど、ポケットに入ってたあめをあげたんだ。僕が怒られた時に女将さんからもらったね、んでその女の子は、え？なんであめ？みたいな顔でちょっと見られた。けどなんかもらってくれた。今思えばおそろしいね、本当に。そのあめの味は抹茶味だった。僕なら抹茶味のあめなんて買わないな。でもその時大阪のおばちゃんがよくあめを渡す意味がわかった気がした。

それから泣いてた抹茶ちゃんはこなくなった。その仕事をやめたのかどうかはわからないけど、抹茶ちゃんがあめをなめてなければいいなと思った。

結局僕はそこで1年半働いた。狂ったようにね。



スダタカヤ



プライドが高い、狙ったものは追いかけて回す
元気な人に興味を持つ

ゆったりしてる、怒ると怖い
クールな人に興味を持つ

嘘が上手、本音を言うのは尊敬できる人のみ
可愛い人に興味を持つ

臆病、割り切りができるものに関してだけ行動が早い
考え方が似ている人に興味を持つ

楽天的、リーダーになると能力を発揮する
正直な人に興味を持つ

ナルシスト、自信が無いことは一切やらない
「一般人」に興味を持つ

誰にでも平等、要約することが上手い
自己肯定感の高い人に興味を持つ

守りが硬い、大胆な行動はあまりしない
社交的な人に興味を持つ

理性よりも本能を優先、遊ぶのは人一倍得意
情熱的な人に興味を持つ

持ち前の明るさが自分を苦しめるときがある、集団行動が好き
攻略が難しそうの人に興味を持つ

天然、何事も許してくれそうに見える時は何も許していない
優しい人に興味を持つ

自由人、ゆっくり波が変わるので突然居なくなることが多いが意味
は無い
自分をもっている人に興味を持つ

中学2年生の時 iPod を親に買ってもらった。それまで音楽は、地上波で流れてくる音楽と好きなアニメの主題歌を知っている程度だった俺は、自分の求めている「何か」を求めて、当時渋谷の真ん中にそびえ立っていた HMV に足を踏み入れた。ここで CD を売っているってことはどこかで聞いて知っていた。

エレベーターを使って最上階まで一気に登って、陳列されている CD を片っ端から眺めていった。音楽についてあまりに無知だったのもあり、ジャケットの印象から中身を想像することすらできなくて途方に暮れたが、その途中、明らかに周りとは視覚的な印象だけでも何かが違う一角を発見した。棚の上には「HR/HM」という表記があった。そこまで並んでいた CD は自分にとってはさっぱりわからない「多分洋楽？」程度にしか認識できないものばかりだったが、そこに並べられていたのは、ドラゴン！ゾンビ！剣を持ったマッチョな男！ゲームソフトにしか見えないカラフルなイラストを前電撃が走った。どっからどうみてもその中に音楽が入っている様には見えなかった。これなら俺にもわかるに違いない！と確信した俺は、その中から巨人が壁を破壊して人間が飛び散っているジャケットのものを選び出し購入、まだ見ていない残りのフロアは全部すっとはして速攻で帰路に着いたのであった。

家について親のパソコンを借りて早速その CD をコピーして、ipod にコピー、再生して、なんだこれ!! さらに俺はぶっ飛んだ。明らかに今まで俺が知っていた音楽とは何から何まで違っていた。異様に騒々しいバンドの演奏、意味がわからないほどの高音域で恥ずかしいほど高らかに歌うボーカル。この際歌詞の内容などどうでも良かった。なんか過激で激しい音楽だ！以外の感想が出てこなかったが、今までとは違って自分の力で発見した音楽、という自意識が大いに手助けして「これは俺のためにある音楽だ」と確信した。興奮のままにインターネットを使い、「HR/HM」が「ハード・ロック/ヘヴィ・メタル」の略だとわかると、それからは毎日の様にインターネットで聞いたことのない曲やバンドを調べることに時間を費やした。月の頭にもらっていた少ない小遣いは貰ったその日に通学途中にあった CD 屋で全て使い果たした。そのうち自分で聞いているだけでは飽きたらず仲間が欲しくなり、中学校の友達に無理矢理魅力を伝えようとヘヴィメタルについて我が物顔で力説し、無理矢理 CD を貸し付けて周りの人間を困らせたが、今となっては完全に恥の記憶なの具体的に思い出したくない。

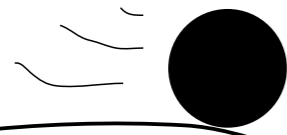
最近になって考えてみると、こういう音楽に最初に興味をもった大きな理由の一つは、自分の保護者、特に親父が普段から聞いていない音楽だと確信したからだろう。昔から親父のことが苦手な親父は大の音楽好きだった。ジャズやブルース、比較的保守的なロックを好んで聞いていた。精神的にだけでも、親というものに対する反抗の手応えを掴んだような気がしたことは、思春期の俺にとっては重要な感覚だった。あのクソ親父が聞く音楽なぞ聞くものか！それが自己表現の手段だった。おかげさまで一時期の俺は、親という枠も完全にはみ出して、「ポップな音楽なぞ全て俗物の食う餌」などと思込むレベルまで縮れ毛の生えたプライドをシコシコと墮落させていた。

しかしその調子で少しづつ年齢を重ねていく中で、自分の好き好んでいた音楽にも少しづつ飽きていることを無視できなくなってきた。自分の好きなだったはずのものが急に馬鹿っぽく見えてしまう現象は、思春期の経験としては割と普遍的なものではないだろうか。以前よりも音楽というものに対する視野が広がっていく中で「親父の聞いている音楽」が段々俺に近寄ってきた。そんなある日、ふと親父の CD の棚にあったビートルズの CD を拝借して聞いてみたら普通に受け入れることができてしまった。というのは嘘で、本当はあまりに良い音楽だったので素直に感動したのだ。それまでの自分は、何かを”しないこと”を自己表現の手段にしていたが、何かを”すること”で自分を作っていく様に立ち直っていったキッカケだったんだと思う。それからはできるだけイロイロな物事を横断的に摂取するように心がけるようになった。

年齢は関係なく、自分が何かを”していない”事を自己表現として利用している人は沢山いると思う。売れている音楽だから聴かない、特定のタイプの人が好きだから自分は興味ない、いろんな理由を用意する。今の俺がそのような言動をしていないとは全く言えない、まだまだ身に覚えがあって恥ずかしい限りだ。久しぶりに聴いた「巨人が壁を破壊して人間が飛び散っている」アルバムはそんなことを思い出させてくれたのであった。



文：齋藤 匠



タイトル 週刊 たまたま、# 8 「いろいろ」
参加者 伊東あけみ、鈴木玲美、おおやぎあみ・はらぐちゆか、スダタカヤ、下山健太郎、太刀川瑠姫、齋藤匠
発行日 2020/6/8
発行 東京造形大学 CS-lab
〒192-0992 東京都八王子市宇津貫町1556
編集 下山健太郎

